



EVENT REPORT

つる編みに挑戦しよう！

11月12・13日の2日間、史跡公園の山でつるを採集し、カゴ作りに挑戦するイベントを開催しました。

クズやアケビ、フジなど山に自生しているつるを見つけ採集していきます。「自分で採るのが楽しい！縄文人になりきった感じ！」と自然の中での体験を楽しんでいただけたようです。

2日目は縄文講座から。縄文時代にはカゴ編みの技術が出来上がっていたことを学び、いよいよ実践です。つるの扱いに戸惑いながらも、こんなカゴにしたいとイメージを膨らませながら編み進め、素敵な作品に仕上げました。



4月に種付けしたカキを収穫するイベントを、11月27日に開催しました。

当日は風が強く、船での収穫は漁師さんにお任せしました。参加者さんは、船着き場で半年ぶりにカキ縄と再会！金槌を使って縄からカキ殻を取り出す作業を行いました。

昼食はカキランチ！縄文人と同じ道具でカキ剥きに挑戦したり、土器で煮たカキ汁を味わったり…と獲れたての旬の味を堪能しました。

カキ養殖体験②



新年 謹賀

幸多き年になりますように

旧年中は、おかげさまで開館30周年の節目を迎えることができました。30周年を目指して作り続けた「丸木舟」は、10月の縄文村まつりで多くの皆様が見守る中、無事漕ぎだしました。舟と同様、新たな気持ちで、皆様に楽しんでいただける資料館にしていきたいと存じます。今年も、15年ぶりに「縄文シテイサミット」がここ東松島市で開かれます。よりわかりやすく「縄文」を発信してまいります。本年もどうぞ縄文村をよろしくお願い申し上げます。

令和五年元旦

日本人とうさぎ

今年の干支は「卯」。ウサギは日本人にとって縄文時代以来の馴染み深い動物です。シカ、イノシシとともに狩りの対象となっていたようで、多くの縄文遺跡から見つかっています。動物の骨としてはシカ、イノシシ、タヌキに次いで4番目に多い動物です。

青森県の三内丸山遺跡では、ノウサギはシカ・イノシシよりも多く出土し、動物全体の約8割を占めていたことが明らかになっています。当時のムラやその周辺にはクリ林が多く、生育と実の採集のために雑木が切られて草場が広がり、ノウサギの生育に適していた環境だったと考えられています。ノウサギは里浜貝塚からも見つかっています。シカ・イノシシに比べると少ない量ですが、縄文時代を通して、タヌキやテンなどとともに捕獲されていました。

ウサギは繁殖力が強く、「子孫繁栄」の縁起物にもなっています。生後10か月ほどで子ウサギを産めるようになり、年3～5回、一度に1～4頭の子を産みます。縄

文時代のムラの周辺にはかなりのノウサギが生息していたものと推測され、縄文人にとっては貴重なタンパク源として、また寒さをしのぐ毛皮用としても重要な動物だったと思われます。

弥生時代以降のウサギについては、骨そのものが残っている遺跡が少なくよくわかっていませんが、『日本書紀』などの歴史書の記載や、徳川將軍の鷹狩り、武家の練武（武芸の稽古）などの記録などから、狩りの対象とされていたことがうかがえます。近代以降は、陸軍の防寒着の材料としてウサギの毛皮の需要が高まったこともあり、ウサギ狩りが盛んになりました。戦後も続けられますが、昭和40年代以降は減少し、現在はウサギの減少や狩猟者の高齢化によって衰退傾向にあります。

その一方で、マタギのように狩猟を生業とする一部の人々によって、現在も狩りが行われています。ワナ猟や、習性を利用して植物を束ねた輪を投げて、雪穴に隠れたウサギを生け捕りにする「ワラダ猟」は縄文

以来の猟法の可能性も考えられます。

ノウサギは今も里浜に生息しています。その姿を確認したことはありませんが、ヤマザクラの苗畑で50cm程に成長した苗がごとごとくノウサギに食い荒らされたことがありました。芽が出た高さがちょうど良かったのでしょうか。苗の先端が、あの上あごの前歯（切歯）で噛み切られたのだと思います。鋭く刈られていました。宮戸島で、ノウサギを捕まえていたという話は聞いたことはありませんが、縄文の昔から現代まで生息し続けているのかもしれない。



里浜貝塚から見つかったウサギの下顎の骨